

思はず聲に曇りの出づるを、静之助は覺られまじと衝と退きて、

「ぢやア横井、鳴岡さん、もう逢はないよ」

と行き掛るに、幸江は堪らず追掛けて、

「あらッ、一寸……困つ丁ふねえ。ぢやア春海さん、何處へ。お前さんは今から何處へ」

と忙しく問へば、静之助は走りながら僅かに見返り、

「え、察しの悪い。死際の一働き、鎌倉だ、鎌倉だ」

(四八)

三八は永訣を歎きお正体なきお小夜を、又も引立てつ、静之助の馳去るを見送り居たる男共を、屹と見返り、

「さア、風上へ回らないか。早く火を掛けなから。もし逃げて出る奴があつたら、

構はないから叩き殺せ。早くしな、早く」此時。

「一寸、横井さん」

と倉卒しく聲を掛けつ、静之助も追行きたる幸江が此方へ引返し、

「誰か来たよ。車が其處へ駆けて来たよ。事務所の人達ぢやアないか知ら。見付らないやうにしないぢやア」

と息を切つて云ふに、

「そいつは大變。こんな往來から入つた所へ来るんだから。社に用のある奴だから事務員か何か、機の悪い時に來やアがつた。おい、皆、暫く此方へ隠れなくつちや」

と門前の燈光の及ばぬ方へ躲さんどす。

早くも其處へ一輛の人力車。車上の人は頻りに四邊を見回しながら、逃行く一群を目早く見止みて、

「もし一寸、横井さんといふ方は」

と問掛けぬ。それは事務員ならぬ若き女の聲なるに、三八怪しみて一足立出で、
「誰だ。誰ですか。横井は僕さ」

「おやまア、やうく……妻は野間の岩でございます」

「え、お嬢さんで」

「はい。承つて置きましたお宅の方へ参りましたが、下谷の製薬工場だと聞きま
して、その方へ参つて又此方へ」

と云ひつゝ、車より下来るに、三八はお小夜を他の者に見張らせ置きて、

「お嬢さん、何故今頃こんな所まで。社主が聞濟んで下さいましたか」

岩子は近々歩み寄りつゝ、

「いえ、申譯がありませんが、その事がまだ抄取りませんから來ましたので……と
申すは、親共はまだ鎌倉から歸りませす、また手紙や人傳では、何日迄手間取るか
知れませんが、明日の一番汽車で、妾が参らうと思ひます。今日までも、直々
参りたかつたんでございますが、不在中は決して家を明けるなど、堅く申付られて

居りますから、心ならず控へては居りましたが、お誓ひ申した皆さんへ、妾が餘り
濟みませんから、叱られますのを承知で明日は。けれども皆さんのお困りの事を、
度々催促にお出でのお前さんから聞いて居ながら、またこんな事で、一日二日も遅
れますのは、もうくお氣の毒でなりませんから」

と懐中より紙包を取出だし、

「此處に五百圓のお金があります。是を皆さんのお食料にして下さつて、ごうかも
う一日二日だけの所を、穩便にして待つて居ては下さいませんか」

「なに、そりやア喰積きさへ出來ますりやア。だがこんな大金を頂きましては」

「いえ、是は全く妾の貯へのお金なんで、皆さんの御用に立つたら、本望でござい
ます。そしてもう一つお頼みが……今下谷の方で聞きましたか。裏切つてこの社へ
歸つた人があつて、その人達を處分をする爲に來なすつたとか。それがどうも氣掛
りで、今此所で手荒な事をして下さつては、中に立つた妾が眞に困ります。裏切る
やうな人の出來ましたのは、受合ひながら、運びを付けない妾の罪でございませすか

ら、一日二日お待ち序に、妾に免じて其事を今暫く……どうでございませうかね
え」

「なに、喰續きの心配までして下すつた貴女のお言葉ですから、一日二日だけの事
なら」

「御猶豫を下さいますか。屹ど左様に願ひます。親共が聞入れてくれますれば好し
矢張り頑固な事を申しますからな、別に考へもありませんから、必ず妾が歸りますま
で、何事もなく……屹どでございませう横井さん」

と念を押すに、

「はい屹ど」

と三八堅く承引きぬ。

(四九)

停車場の鈴聲響きて、汽車まさに發せんとする刹那、人力車上に氣を揉める静之
助は運宜く切符を掴み得て、やうく汽車へ乗込みしが、一方ならぬ胸の動氣は、
乗遅れじと急ぎしばかりにはあらで、人を殺して、我もまた死なんとする今、心自
然に穩かならで、たゞ息使ひの荒きのみか、面の色も變りたらんを、人に怪しまれ
やすらんとて、片隅へ小さく俯向き、無言のま、幾驛をか打過ぎて、大船にて乗換
へれば、間もなく鎌倉。夜は十一時に近からんか、幸ひの月を便りに、豫て聞置き
たる方角へたゞ一飛。

この邊には表を平假名の女名前に偽りて、實は目色の變りし髻むしや男の住める
家の多きに、是はまた世間へ驕らん料に設けし事とて、北五郎が方の門上の玻璃燈
には、殊更に朱字にて、野間別荘と筆太に記したり。

静之助は此處ぞと足を止めしが、はや門を閉してあるに、丈高き建仁寺垣に沿ひ
て週れば、例には漏れぬ當世の紳士氣質、表掛の立派に手堅きには似も付かず、裏
へ廻れば、奥の見え透く安普請、押さば倒れんとする薄板塀の低きを見出だし、ひ

らりと内へ飛入れば、此處は庭先の松林、向ふを見上ぐれば棟敷續きて、狭からぬ屋形なり。

北五郎ははや寝たらんかと、右往左往に打見遣れば、奥座敷と思しき方の戸尻一枚なほ閉さで、燈光の指すは、動静を捜るに屈強と、拔足してその外へ窺ひ寄れば此處は便所への廊下にて、内には女の高笑ひ、

「おほ、、、。ねえ皆さん、旦那はあんな御容子の好い事ばかり。御本宅には三人もお歸りを待つてる人があるんだもの、こんな婆さんに離れられないなんてねえ。機織社のごたくがお煩いんで、それで厭々ながら、御逗留をなさるんでさアね」

「いえ、それも有るか知らねえけれど、矢張りお前さんがお可愛いからだ。ねえ旦那。え、もう澤山頂きました、まだその大きい奴を下せえますか」

「察するに、座敷は酒宴の最中にて、北五郎に相手をなすは、嬖妾と下男となるべき歟。今は機悪し。床に入るを待たんとは思ひしが、寝る時にはこの戸を閉さん、

さては忍び入らんこと難し。なんの女は齒牙に掛くるまでもなく、他に一人の男ありとも、何程の事あらん、北五郎の咽喉に掛けて、一撃するに手間は入らずと、下宿へ立寄りて用意せし短刀を抜放ち、音を盗みて椽側へ立上りつ、障子蹴開き躍り入つたり。

「や、泥棒。む、春海。これはどうも」

と北五郎は慌て、逃ぐるを、逃しぬ道らじと小股走りに追廻し、はや襟髪に手は達かんとす。

「あれ……、泥棒……」

と嬖妾は忽ち腰を抜して、たゞ這出ださんとするのみなれど、下男一人と思ひしは、大いなる推測違ひ。今日船遊より速歸りしと思しくて、骨節逞ましき漁夫、加之も三人、次の間に窮屈に畏り居たるにて、曲者と見るより競ひて突立ち、柱掛、眞張棒などを手早く取出し、前後に分れて、たゞ一人を取圍むに、静之助はもう是迄と、鼠の如く逃去る北五郎の頭を的に、びかり閃かして短刀を投付けしが、悪逆

強くも身を躲されて、静之助が最後の恨は、口惜しくも遺へぐさり。同時に其身は
どたりと其處へ。

五〇

北五郎は昨夜騒ぎのありし後、二度の酒盛、事なかりしを悦びの杯重ねて、今朝
は二日酔の頭上らす。日は高く昇りても、なほ寢所にありたるが、思ひも掛けず、
「阿父様、阿父様」

と呼ぶ聲のするのに、怪しみて眼を睜れば、岩子の一番汽車にて來りしにて、近
く枕許に坐し居たるなり。

「や、お前、何故此處へ」

とむつくり刎起きんとして、頭を抑へつ、徐ろに枕を離れ、

「何故氣儘に遣つて來た。己の不在中は、何處へも出るなど云つて置いたに」

と一目見るより怒鳴り付くるは、早くも岩子の來意を察して、口開かせまじとて
なるべく、たゞさへ頭痛の皺め面へ、また故らに苦味を持たせつ、王冠頂かぬ閻魔
顔怖ろし。

「そのお叱りはあらうとは存じながら」

と云掛れば、

「それを知つて居て何故來た」

「大變な事が起りましたから參りました」

「何だそんな大形な。屹と社の方の事だらう」

「はい。手紙もお出し申しますし、使の者も、段々遣はしましたけれど、相手にな
るな、打遣つて置けばかりのお返事でございますが、遠くへ懸離れて居つしやる
阿父様と違ひまして、傍に居ります妻は、見逃して居られません。すでに橋場の家
を、毀し掛けた事もございますし、昨夜はまた、社の方へ裏返つた者があるとかで
大勢への見せしめに、不義者を殺すのだと申しまして、重立つ者が、千住へ出掛け

た位でございますから、もう一日も此儘に過しましては、屹と死人も答人も出来まして、結局は阿父様のお名前が……」

「なに、構はない。職工同士に死人が出やうと、答人が出やうと、此方の知つた事ぢやアない。まして名前の出る事位を恐れて居て、横着な職工を扱ふ業が取られるものか。彼んな奴等は根限り酷めて遣つて、ぎょう／＼云はせないぢやア爲が好くない。打遣つて置くが好い」

と聞入る、模様更になし。

岩子今は、面を犯して、も諫めねばと、口に支へて云難きを強ひて忍びて、

「阿父様はそれまでに遊ばして、有が上に財産をお殖しなすつて、誰に遣らうと思召すのでございます。お子と申しては、妾一人でございますが、妾は左様な不義な大勢の貧窮人を根限り酷めてまで、積上げた財産は、決して頂きたい事はございません」

とすつさり云へば、北五郎は嚙付く如く怒り立ち、

「え、小間傭れた事を云ふな。親の事は思はないで、却つて職工共のひいきをする奴。そんな不心得な者は家には置かない。此處にも一時も置れない。其方がそんな量見で、奴共を勞はるから、春海奴が好い事にして、昨夜己を……」

「おや、昨夜春海が」

「此處へ刺殺しに来やアがつたが、あんな者に仕止められるやうな己ぢやアない。直取押へて、警察へ出して了つた」

「そ、それはまア大變な事を」

「大變な目に出逢つても、少しも弛まない己だ、誰が何と云つて來ても、思惑通り何處までも遣る。何處までも遣るんだ」

(五一)

岩子は親一人子一人の間柄なるに、それさへ北五郎を見限りしと思しく、能くは

暇を告げずして、別荘を立出で、また汽車にて引返しつ、橋場の家へ歸りしは、まだ十一時頃なりき。それより急に人を馳せて、三八幸江を呼立てしに、幸江のみ直に來りぬ。

岩子は思ふ旨ありて、正宅の勘定場へ打通しつ、

「横井さんは」

と訝れば、

「さア、其事でございます。實の所は、春海が社主を手にかけて、自分も死ぬと申しまして鎌倉へ。すると丁度その後へ、貴女が入りつて下さいまして、一日二日差控へる事になりましたから、直に横井が春海の踵を追ひまして、鎌倉へ止めに參つたのでございますが、間に合いましたか遅れましたか、何しろまだ歸りませんので妾はもう氣が揉めました」

と心配顔。

「それで様子が分りました。妾も今鎌倉から歸つたのでございませうが、春海さんは

警察へ連れられなすつたと申す事で」

「へえ、ちやア仕損じましたんで。お宅に取つては、お目出たいんでございませうが警察へ突出されましたんちやア、重い罪に落ちるのでございませうね。あの人にも似合はない、短氣な事をいたしましたして、困つた事でございませう」

「妾も親共の無事であつたのは、嬉しうございませうけれど、春海さんがお氣の毒でなりません。急ぐ用があつて、其儘歸つて來ましたが、助ける工夫はないものでせうか」

「左様ですよ。相談相手の横井が居ませんもんですから……ちやア横井は、その警察の方へ參つて居るかも知れませう」

岩子は立上つて、我が預かりの鍵を取出し、後に聳ゆる大金庫の扉を開きて、一纏めに大袋に入れし一千通の證書を出だしつ、

「鳴岡さん、妾は色々親共へ申しましたが、もう兎ても無益でございませう。いくら錠つて頼みましても、開入れてくれます見込はありませう。それゆえ折角お約束い

たした事を、只今限り、お断り申さなければならんのが、眞に悲うございます。けれどたゞ妾が手を退きましては、昨夜の春海さんの例もまたある事で、必ず親共へお突掛りなさるだらうと、それを思ふと、安心が出来ませんから、どうか機械社の事は、思ひ切つて下さつて、皆さんに外の業に就いて貰ひたさに、前借の證文は、お前さんへお渡し申しますから、それくお返し下さいまし。是で十圓づゝの御返金には及びませず、また他所へお住込みなすつても、訴へられる御心配はありませんから』

と思ひ切つたる計ひに、幸江は是はと膽を潰して、

『おやく、ちやアこの證書を、頂いて歸つてもお宜しいので』

と薄氣味悪さに顔を見上げぬ。

『宜しうございますとも、決して皆さんへ御迷惑は掛けません。その代り、どうか親共へのお恨はお捨て下さるやう、御一同へお話を願ひます。固よりこの證書ばかりでは御不満足で、積金も一所にお返し申したいのでございますが、女の妾では、

帳面の調べやうも存じませんから、罪は妾が引被りまして、親共へ内々で、證書をお渡し申す心に及じて、暫く御猶豫を願ひます。何れ近々、お手に入るやうに取爲しますから』

この時玄關前に車の音して、

『お歸りー』

といふ聲に、岩子のはつと飛上るまでに驚き、

『さア大變、親共でございます。今妾が歸つて参りました時は、まだく逗留の様子でございますましたのに……鳴岡さん、見付かつては大變でございますから、此方からお歸り下さいまし。さ、お早くして下さらなくつちや』

と急がし立て、證書を入れたる大袋を抱へさせ、奥庭の沓脱石にて庭下駄穿かせ、その身は跣足にて先へ立つ、

『それく、彼の勝手口の小門から』

(五二)

北五郎ほどの没義道なる男たりとも、なほ一點の人情はありと思しく、子は可愛きものに見たり。

岩子が別荘を出去りし時、何日になく、大いに激したる様子ありて、家には置かぬと叱りし我が言葉を思ひ合せば、若や身を投げなごする覺悟にはあらざるかと、しほらしくも氣を揉出だして、無事に立歸りしを見届けねば安心ならずと、さてこそ一汽車遅れて馳歸りしなれ。

車より玄關へ下立てば、勝手元の下男下女走り出で、二階の嬖妾共さへも駆下り階子の下まで出迎へしに、岩子のみは出來らず。されば北五郎は、心配しつゝ、二階に上りて、居間の設けの座に着けば、ぞろ／＼後に従ひし女共、頭を並べて、『お疲れでございませう』

と挨拶するを、すらり見渡しても姿も見えぬに、

「嬢はごうした。決してそんな筈はないんだが、まだ鎌倉から歸らないか」
と、問掛くれば、岩子附の小間使聲に應じて、

「いえもう前刻お歸りでございました」
と云ふ。

「む、梅、嬢は歸つて居るんだな。それなら直に出る筈だが、歸つて居ながら何故挨拶に來ないのだ」

「それは大方お客様とお話中だからでございませう」
「ございませうと云つて、お前は傍に居なかつたのか」

「はい。御勘定場で御面會でございまして、此處へ來ては可ないと仰しやいましたから、妾はお臺所の方に居りましたので」

「さうか。それならまづ安心だが、客があるなら、奥座敷で逢ふとか、自分の居間へ通すとか爲さうなもんだが、勘定場で話しをするなんぞはどうも奇体だ。梅、何

をして居るかそつと見て來な」

お梅は畏つて下行きしが、不審の首を傾けつゝ引返して、

「旦那様、只今まで居らした筈でございますが、お二人共、どう遊しましたか」

「はてね、居ないのか」

「そして金庫が明いてございますが……」

「え、金庫が。こりやアますく奇体だよ。どれ己が」

金庫に異状ありと聞きては、暫くの猶豫もなく突立ちて、高き梯子を二三段づゝ、飛下り、横筋遣に勘定場へ駆入るや、金庫の内を取調ぶれば、入置きし一千通の證書の見えぬ。

「や、こりやア職工の證書が袋入の儘で見えない。ど、ど、どうしたんだらう嬢めは。梅、梅、嬢の所へ逢ひに來たのは、どんな奴だ」

「お社の方の鳴岡さんと申す方で」

「む、ちやア嬢めは、證書をくれて遣つたな。え、失錯つた。うか／＼鍵を渡して

置いて、泥棒をされるとは思はなかつた。忌々しい奴。どうしてくりやう。呼んで來な、呼んで來な。いや／＼、連れて來るのを、此處で待つちやア居られない。好いよ。己が行く。行つて直々……」

今は可愛さは何處へやら。廊下を大股に轟かしつゝ、岩子の居間へとツばくさ。

閉し、障子を手荒く開きて、一足踏込むと共に、ぎよつと驚き、

「ヤツ大變。嬢が咽を、嬢が咽を……」

と我を忘れて轉び入つたり。

(五三)

北五郎は二階の居間に悄然と坐し、死骸の傍にありし岩子の遺書を、涙持つ目に讀返しては讀返し居る。常は能く笑ふ嬖妾共も聲を收め、みな片隅へ退きて手持不沙汰。香華手向けんといふ者のあるを機に、打連觸ちて出たりぬ。

「どうも大變な事で」

と入達へに正也はいきせき。

「何どもはや申上げやうもございません」

とびたりと坐りて俯向けば、北五郎は眼を拭ひて、

「お、高山、察して下さい。己はもうどうして好いかと思ふばかりで、生て居る

心地はしないよ」

「御道理でございます」

「世間で能く手足をまがれたやうだと云ふが、己はどうして、心の底まで抉られて
行かれたやうだ」

「それは御無理はございませぬ。また何故左様な、御短氣な事を遊ばしましたか」

「いや、嬢が短氣なんぢやアない。全く己が因業なからだ。まア是を見て遣つて下

れ」

と遺書を渡せば、正也は匆々に見了りて、

「ぢやア矢張り、職工の事を御心配なすつて。眞にどうもお氣の毒ども、御不便ど
も……」

北五郎は云はんとして、や、言葉途切れしが、遂に聲を曇らせながら、

「高山、己はもうすつかり發心して了つた。今朝嬢が鎌倉へ来て、強慾にして積ん
だ財産を誰に遣る、妾はそんな不義な後目を嗣ぐのは厭だど、くれぐれ己を諫めて
くれた。けれど己は目が覺ないで、まだく大身代にならなくつちやと思つて居る
が、それは眞に淺慮な量見だつた。まだ晝前までは健かて居た嬢が、一寸の間に死
んで了つて居るやうに、己がッツくり息を引取つたとなつた時は、もう家作も地所
も、貯金も、社の方もそれ限りで、少しでも己に縁のある慾張共が、分取りにしや
うと云つて、屹と大揉めの後が公事沙汰になつて、結局はその費用に入上げて了ふ
のだらう。考へて見ると馬鹿くしくつて、人に憎まれても財産を殖さうといふ心
は、もうとんと無くなつて了つた。だから急に家事を改革し、己の餘年を送られる
だけを取つて置いて、餘の財産はみな擧げて慈善事業に」急に話頭を他に轉じて、

「時に高山、今社の方はどうなつて居る。小人數で、も遣つて居るのか」
「はい。百人餘りは立歸つた者がございますので、男工の取締は大木に兼ねさせ、女工の取締は、假りにお小夜に申付けました所が、是は再び下谷の方へ連れて行かれる、職工長の太木には、一同が歸服しないといふやうな事で、纒かの人數が、どうも治まり難ねまして」

「そんなのなら猶の事、己はすつぱり廢業して了ひたいんだ。けれど其通り遺書にもあるし、いよく職に離れたとなつては、職工の内に、困る者があるだらうと思ふと、急に世間が厭になつた己の勝手ばかりは、どうも云張つて居られない譯だから、勉めて社を永續する積りだ。だが今はもう勘定前で爲るのではない。一つは嬢の弔ひの爲、一つは職工の糊口の爲に、改めて明日からまた始めたい。それを聞いたら、皆が悦んで立歸るだらうから、己の心を、ストライキ中の者に能く話して、社の方へ呼集めて置いて下さい。己は一寸また鎌倉へ行つて来て、直引返すから」
「へえ、只今からまた鎌倉へ。お嬢様の御葬式はどうなさいます」

「いや、家の萬事は、直駈付けてくれた親類へ頼んで置いた。鎌倉の方は、時刻を争ふ大切な用だから……なに己は直に歸る。暮れるまでには屹と歸る」
とはや立支度に取掛る。

(五四)

同じ日の午後四時頃、北五郎は鎌倉の別荘の玄關より入らんとして、頻りに後を見返りながら、

「さア、皆すつと此方へ」

と先に立てば、小腰屈めつ、續いて入るは是何人。前夜縛られて警察署へ引立てられ、今日は謀殺未遂を以て、検事局へ送らるべき靜之助なり。その後に従ふは、三八と外に一人、是もまた思ひ掛けなきお小夜なり。

北五郎は下男を見掛けて用を命じ、さて三人を奥座敷へ誘ひて、

「ねえ春海、丁度間に合つて好かつたよ。何ね、罪は重ひだらうけれど、書を受けやうとした己が、直々に願つて出て、事情を明して頼むんだから、この願下は、多分叶ふだらうとは思つて居たが、警察には留置の時間が極つて居るんだから、もし君が裁判所へ廻されて居た日には、屹と事がむづかしくなつて、己の心配も水の泡だし、云残して死んで行つた嬢に對しても、濟ないと思つてね、大變急いで駈付けたんだ。所がまア効があつて、こんな嬉しい事はないよ。まア〜罪人にならなくつて目出たい」

と云ふ。静之助は兩手を突きて。

「私の爲には、成程目出たうございます。願下げて下さつたのは、有難うございませが、お嬢さんの事を思ひますと、こんな悲しい事はございません。初め社の工場へ參觀に入つた時、私がお歎き申した所から、大勢を救つて遣らうと思召して、それが爲に種々御心配下さつた末、行末長い御一命を、お捨てなすつたんでございますから、手もなく私が御自害を勧め申したやうなもので、何とも申譯がございま

せん。それなのにその御自害が、一つは私を助けて下さる爲だと承りましては、もうどうも勿体なくつて、ちつとして居られないやうな心持で」

と次第に涙聲になりて、遂に言葉は聞えずなりぬ。

北五郎もつい促されて悲しくなりしを、故らに氣を換へて、他の二人の方に向ひ

「お前達にあんな所で逢はうとは思はなかつた。誰に聞いたか知らないが、春海の拘引された事をもう知つて、それで見舞に來たのか」

と問へば、三八は聲に應じて、

「このお小夜さんは全くその爲でございます。始めは鳴岡が、お嬢さんから承つて直にお小夜さんへ知らせました所から、大悔りで、遣つて來たんださうでございます。私はまた、昨夜お嬢さんのお言葉がございまして、春海君を止めなければと、新橋へ走り付けると、最後汽車の出た跡で、こりやア失錯つたと思ひましたが、氣掛りでなりませんから、今朝の一番で來て聞合せますと、その男なら仕損じて、警察へと云ひますから、せめて差入物でもと……」

この時下男が庭口より出来りて、

「旦那様、千住への電信は、只今掛けて参りました。汽車も既う間がありません」
といふに、さらばとて、四人等しく別荘を立出で、日の暮早々東京驛に着けば、
機械社の提燈高張等を點し列ねて、此處まで出迎への人数夥多して、静之助の無事に立歸りし姿を見るや、聲を揃へて、

「春海君萬歳……」

と叫びたり。静之助は驚きて、

「おい、少しは遠慮をしてくれないか。お嬢さんの事を思つて見ろ」

と聲を限りに制すれば、一同は猶豫もなく、

「お嬢さん萬歳……」

と云ふ。

「え、死んだ人に萬歳があるか」

と叱れど、入亂れし多人数の聞分ければこそ、その悦び勇める有様狂氣の如し。

(五五)

出迎への多人数は、北五郎の一行を中に圍みて、共に千住機械社へ引上げぬ。北五郎は重立ちし者を事務所へ呼入れ、さて正面に突立ちて、

「今迄は皆へ心配を掛けたが、すでに非を覺つた心中は、最早高山から聞取つてくれた筈だ。一所に歸つて来た人達には、直々に話した通りで、もうこの野間は、從前の野間ではない。明日からまた仕事を始めるのだが、今は野間の營業の爲ではなく、職工一同の生計といふ事が目的だから、社主の儲けは眼中に置かないで、皆の便利のみを計る考へだ。其處でどうしたら便利だらうか。それは今更問ふまでもなく、一同の望み通りにすれば好いと思ふ。すなはち二割と云出した積金を、一割にして、勘定日の十六日を、元の五日へ繰戻し、また休業日も、毎日一日と十五日とに。それから寄宿舎の食料も、已前へ返して、すべて元々通りにしたら好からう。」

けれどそれでは、物足りないやうだから、前借の證書は、死んだ娘の志にまかせ
て、皆の手へ返つたまゝ、帳消にしてしまはう。それに又すつと巳前に、春海から云
出した通り、職工の日給を、二割増といふ事に定めやう』

といふに、一同は意外の悦びに顔を見合せ、皆々満足の表したり。

「それ位では十分ではあるまいが、職工の爲ばかりを思つて、事務所の勘定に損が
生じ、自然立行かないやうな事になつては、却つて皆の不爲だから、まづ此邊で我
慢をして貰ひたい。それから次は、役員の事だが、春海静之助に増給をして、巳前
に立歸つて職工長に、また大木勘作は、元の男工取締にといふ所だが、皆が感情を
損じて居て、歸服しない様子だから、是には手當を與へて免職をさせ、横井三八を
その後役に。なほ女工取締は、無論鳴岡幸江を動かさない。増給をして地位は其儘。
けれど女工の人数は、男工の四倍もあつて、豫々一人では可ないと思つて居た所だ
から、此際田安お小夜を昇せて、女工取締にする』

と云渡せば、一同はまた満足の聲を合しぬ。北五郎も満足の様子にて歸宅しつ。

後に幸江は静之助の前に進みて、

「ねえ春海さん、お前さんなり横井さんのお骨折で、思つたよりも、まだく結構
に治まりました、こんな目出たい事はありませんが、その目出たい序に、婚禮をし
たらどうです。由兵衛さんへは、妾が好いやうに話しますが、丁度お小夜さんは、
家から通はれる身分になつたんだから」と云へど、

「いえ、意外の好結果を得たのは、それは如何にも目出たいが、烈婦岩子さん
の御葬式も濟ないのに、婚禮話杯爲て居られない』

と静之助は厳しく刎附け、

「所で高山さん、私は一同に代つてお願ひがあります。社主は明日から仕事に掛れ
ど仰しやいましたが、お嬢さんの御葬式も明日ださうで、御恩を受けた一同は、せ
めて一日丈でも謹身して、お墓へお送り申さねば濟みませんから、仕事は明後日か
ら掛る事に、社主へお願ひ下さい』

といふ。正也は快く承引きて、直に橋場へと出行きぬ。静之助は他の者を誘ひて

工場に入り、其處に控へ居たる職工全体に打向ひ、社長の好意に詳しく傳へて、此後の心得方をも入聞せつ、さて製藥商會へ車を馳せて、雨降つて地堅まりし現狀を打明け、深く義心を謝して、下谷の分工場を返却しぬ。

幸江はお小夜の歸ると共に、由兵衛方へ赴きて、彼の僻み心の立腹を説きなだめたれば、是も今までの不心得を詫び、また已前に立歸りて、婚禮を急立てぬ。

翌日は亡き岩子が出棺の當日とて、職工悉く會葬したるが、またその翌日は、静之助お小夜が婚儀を挙げ、追つて家を持までは、静之助も由兵衛方に同居をなして明れば新夫婦の機織社へ出勤するを、それと見たる職工は、他の一同へ觸歩てき、

「もう今日は遠慮は入ない。一番派手に祝はうや」と説廻るに、一同は「ら〜と顯れ出で、二人が行方に立塞がりて聲を揃へ、

「春海君萬歳——。お小夜さん萬歳——。千住機織社萬々歳——」

お小夜静之助 (終)

樋口隆文館

營業案内

貸本營業の方又は取次

販賣營業の方で樋口隆文館

御取引を開始やうと思はる方は郵券三錢御送り下されば、早速に御直目錄を御送りいたします。
樋口隆文館は日本に於ける唯一の貸本向小説専門の御問屋であり、貸本向の小説なれば東京版でも大阪版でも一切取り揃へて御安ういたします。

樋口隆文館は自家出版物のみにて現に七百種程所有して居る者です。安んじて御覽無く御取引を願ひます。樋口隆文館は毎月新版月報を御得意様へ無料で御知らせ致します。
樋口隆文館は毎月新事なく新編を發行いたします。其作者は現代に於ける知名の小説家て加之に内容が面白く口給が奇麗で其の製本の形式までがすべて貸本向に出来て居ります。
樋口隆文館の營業場所は大坂市南區三休橋谷南へ入西側、電話番號は大坂八七九七

大正七年二月八日印刷
大正七年二月十三日發行

定價金六拾錢

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
有所權著作
(行與斷無禁)
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

【附典助之静夜小お】

著作者 武田仰天子

發行者 樋口源次郎

大坂市南區鹽町通四丁目
十二番地

印刷者 紅野次郎

大坂市南區三休橋谷南へ入西側

發賣元

樋口隆文館

電話南六七九九番
振替口座大坂八七九七番

淚香小史君譯

鈴木錦泉君畫

洋装美本

探偵小説 眞

暗 全壹冊

定價六拾錢
送料六錢

探偵小説 指

環 全壹冊

定價六拾錢
送料六錢

探偵小説 大

盜賊 全壹冊

定價五拾錢
送料四錢

淚香先生の譯文に他の企及し能はざる一種の妙味あるは、世間既に定まれる評あり。

「眞暗!」指環!! 「大盜賊!!!」

この三探偵小説は數多き淚香先生の著譯中にもわけて興味深き出色の名編にして剝骨刻肉の悽絶奇絶なる怪事實を寫すに、先生獨特の大手筆をもつて、眞にこれ一讀三嘆の好讀物!!

春風樓主人作

谷 洗馬君畫

悲劇小説 藤浪

全二冊 各一冊
實價五十錢宛
送料二冊ニ付八錢

八幡白帆君畫

悲劇小説 隣り合せ

全二冊 各一冊
實價五十錢宛
送料二冊ニ付八錢

本書は大阪日報に掲載せられて大好評を博し、續いて大阪及び各地の劇場活動寫眞等にも大當りを占め得し好評小説にして、良人は金澤中學の教諭で日柳涉といふ好紳士、其細君の苗子といふ年は二十歳の顔附の美人と、其子の住江といふ幼な少女の身の上の就いて種々の波瀾を起し來る可憐な物語で、讀者の襟を濡さしめる極めて哀慘な悲劇小説です

人生婦人の身と作る莫れ、百年の苦樂他人に由ると詩人白樂天はこれを千年の往古に喝破した、語は陳腐に屬して居るが、今も猶それが眞理たるを失はぬ。實にや婦人一代の不幸は、其の生涯の全身全靈を托する、良人の人格の良否の如何によつて定まる、本書は結婚の輕々しくすべからざるの意味を寓した悲劇小説で、新聞及び劇に上場せられても各大歡迎を受けた成功の作です。

三品園作君

歌川珣君畫
青年士官 全二册

笠井鳳齋君畫
血染の短刀 全一册

山本英春君畫
戀の執念 全一册

山本英春君畫
雪間の紅梅 全二册

三品園君は我文壇に於ける先輩元老であるが其性恬淡賣名を念とせられざりしが爲め、其名聲と實力とが未だ世間に知られざりし實に隠れたる現代大家の一人である、此人の作中で、『青年士官』は軍事探偵小説で、憲兵少尉菊池賢造が某將軍の内命によつて身をば卑き車夫に變装してぼん突と異名されて某陸軍大佐の邸に住み込みそして或る重大なる軍事上の秘密を探偵するといふ筋の面白い小説、『血染の短刀』は一種の探偵小説で頗る興味に富んだ小説、『雪間の紅梅』と『戀の執念』とは共に家庭向の悲劇小説で、いづれも各地の新聞紙上で大好評を博した面白いものです。

小嶋孤舟君作

谷洗馬君畫
野菊の家 全三册

山本英春君畫
浪かしら 全二册

山本英春君畫
陰に咲く花 全三册

八幡白帆君畫
流るる星 全三册

山本英春君畫
戀の仇浪 全三册

谷洗馬君畫 川上恒茂君畫
春待つ人 全三册

山本英春君畫
梅花録 全三册

山本英春君畫
歌時雨 全二册

小嶋孤舟氏は絶えず芝居に關係して居る作者である、故に其作のすべてが芝居を見るやうに面白く出来て居る、わけて上記の各編は此作者の代表的の佳作で、そのいづれもが、新聞に劇に活動寫眞に各大當りを占め得た成功の作である。

野菊の家 全三册
陰に咲く花 全三册
浪かしら 全二册
戀の仇浪 全三册
流るる星 全三册
春待つ人 全三册
梅花録 全三册
歌時雨 全二册
さくら草紙 全三册
右はいづれも樋口隆文館の專賣物。

伊藤銀月君著

怒

濤

全二冊

木版彩色書挿入
寫真版書

定價各一冊五十錢宛
送料二冊八錢

鏑木清方君書

出

潮

全一冊

定價五十錢
送料六錢

全編壹百二十餘回に連れる大作にして巻を披けば直に怒濤の面を搏ち來るを覺えしむ新學士と漁夫の子なる絶世の美人、隠れたる偉人、惇厚なる青年、老獺なる富豪、其他編中の人物盡く特殊なる面目と性格とを以て活躍する動す其結構の壯大と描寫の精刻とに伴ふに當代無比の妙文を以てす眞の小説を讀んとする人士は本書を逸す可らず

末岡大尉の妻の登喜子は美人として賢婦として、隊中到處の評判であつて、誰とても大尉の艶福を羨まぬものは無い、されば大尉の喜悅と満足とは實に譬るに物も無い位で、全身の熱愛を其妻に捧げて居たにも拘らず登喜子夫人の大尉に對する態度は極めて冷かである、何が故に登喜子は彼の良人に冷かであるのか此謎を解くものはこの小説出潮である。

樋口隆文館發行

武田仰天君子作

青

海

波

笠井鳳齋書

俱梨伽羅お竹

歌川珖舟書

戀

の

怨

み

山本英春書

いろくらべ

笠井鳳齋書

お小夜靜之助

歌川珖舟書

新聞小説家として武田仰天君子の名聲は既に中外に認識せられて居ます、武田仰天君子の作には、此人獨特の一種の妙味が有りますので、それで多數者に愛好せられるのでありますが、わけて上記の各編は此人の特色が最も鮮に發揮されて居る代表的の面白い小説であります、序に仰天君子の作で樋口隆文館の蔵版總表題を左に後紹介致します、いづれも面白いものです。

樋口隆文館發行

武田仰天君子作
雲間の龍
俱梨伽羅お竹
青海波
いろくらべ
お小夜靜之助
深恩と戀
恨
戀の怨み
新夫
恩と戀
恨
菊唐草
散りゆく花
好いた同志
奇しき縁
若夫
人

遠藤柳雨君作

須磨子と千代子 全二冊

須藤宗方君畫
極彩色口繪挿入
各一冊定價五拾五錢
送料二冊八錢

須磨子と千代子は可哀そうな母娘です、母は意地悪き姑に苦しめられ、娘は邪慳な繼母に虐待られて袖に涙の乾く間もありませぬ、どうして母娘はかくばかり憐な身の上と成つたのでしやうか、本編は實に悲哀な情と涙に満ちた小説です。

恨の焰 全二冊

歌川珣舟君畫
極彩色口繪挿入
各一冊定價五拾錢
送料二冊八錢

藝妓の艶な色香に溺れて邪道に墮落する帝大の學生と、其學生に戀しつゝある心貌共に麗しき下宿屋の娘とを中心にしてそれに友情に篤き義侠の青年と内心如夜叉の悪玉藝妓とを點綴して各人物を活動寫真式に活躍せしむる柳雨氏一流の面白い小説です。

河原紅雨君作

探偵小説 月に叢雲

須藤宗方君畫
全二冊 各一冊
定價五十錢宛
送料二冊八錢

本編は戀愛小説にして探偵小説をも兼ねた頗る興味深いものにして、其探偵の方法には、探偵犬を使つて重大犯人の足跡を嗅がしめて、其逃走の方向を探索するといふ一風變つた面白いものであります

悲哀小説 母の秘密

谷洗馬君畫
全二冊 各一冊
定價四十五錢宛
送料二冊八錢

十八年間、秘密にして來た過去の罪惡とは何それが他人には打ち開けられぬ云ふに云はれぬ母の秘密なのである、本篇は一種悲哀な興味深い小説です。

橋本埋木庵君作

歌川琉舟君畫
事實小説 **お雪幸七**

全三冊 各一冊
定價 五十錢宛
送料三冊ニ付八錢

小野信雄君畫

悲劇小説 **憐なる母と娘**

全二冊 各一冊
定價 五十五錢
送料二冊ニ付八錢

本篇は明治の初年に於ける復讐の事實譚にして、時の縣令安場保和氏より其孝烈を賞揚せられし、お雪と幸七なる烈女と孝子が、多年の艱苦辛酸を嘗めつくして遂に復讐の本懐を遂げ亡父が泉下の恨を晴らせしあはれ健氣なる其波瀾多き経歴をば著者が獨特の温雅醇なる筆で、艶麗あたかも繪巻を見るが如くに潤色せられたる好讀物なり。

本編は乃木將軍の部下に隸して日清の戦役に従軍中、遂に戦地にて名譽の戦死をなせし陸軍歩兵大尉里見重賢氏の遺族に關する悲哀なる實話にして皇國の爲めに父を失ひ、その悲みも去らぬ間に、またもや母を魔の手に奪はれ、親子の縁もいと薄きあけて漸く九歳の友子が友に離れし濱千鳥、たれを寄邊も荒磯に、楫だにたえし捨小舟、かいても無き世をなくく、に險しく荒ぶ浪風に揺れ揉れて七轉八仆、浮きつ沈みつする悲惨なる物語。

樋口隆文館發行

行友李風君作

歌川琉舟君畫
人の怨 全三冊

山本英春君畫
龜甲組 全三冊

長谷川小信君畫
因果經 全一冊

歌川琉舟君畫
安宅丸 全四冊

山本英春君畫
戀の罪 全二冊

李風氏の作には、此人一流の一種の甘味があるの、各編ともに大好評であるが、その中でも『人の怨』は物凄く浅香の沼の怪談であつて一讀鬼氣の身に迫まるを覺えしめ『龜甲組』は明治年間の血腥い事實で、凄惨悲愴の虐殺事件として一府三縣の警察界を騒がせしもの『因果經』は抹香臭い題にも似合はず色氣澤山の悲劇物で讀者の襟を潤はしむる哀慘なもの『安宅丸』は柳營三刀傷のひと名高い堀田騷動の實録で『戀の罪』は演技や淨曲で諸君が御馴染のお駒才三の凄艶な情史をば、此人獨特の一種の文体に極く面白く書いたもの、右はいづれも樋口隆文館の専賣品、

樋口隆文館發行

大評新刊小説

安岡夢郷君作

■ 紫	■ 洞窟の怪美人	■ 女	■ 薄	■ 肖	■ 地獄	■ 罪
須藤宗方君書	須藤宗方君書	歌川珠舟君書	山本英春君書	谷洗馬君書	長谷川小信君書	谷洗馬君書
組	全二冊	全二冊	全二冊	全三冊	全二冊	全二冊

新聞小説家としての安岡夢郷君は、既に老巧の域に入る斯道の先達である、此人の作は可なり多量ではあるが、就中『罪の子』と『地獄谷』とはその最も得意傑出したものであつて、これは哀艶凄惨なる悲劇的事實を極めて濕つぽく書いた情にも涙にも富んだシンミリとしたもの、『肖像畫』は此作者が最近苦心の作で、これは藝術に熱心な有爲の青年畫家と、温良可憐な名士の娘とを中心にして、これに心術の卑劣な陰險の畫家と、虚榮心の強い富豪の令嬢と、輕佻浮薄な青年文士とを點綴した頗る有意味の好小説、薄命怨は妙齡の一美人が父母には死なれ兄とは生別れ、誰を寄邊も渚の小舟浪ど風とに弄ばる、可憐の態を描いた小説、いづれも新聞紙上で大好評のもの。

樋口隆文館發行

大評新刊小説

羽様荷香君作

■ 雲	■ 命	■ 男	■ 電	■ 武士系
須藤宗方君書	長谷川小信君書	山本英春君書	山本英春君書	前野春亭君書
全五冊	全三冊	全四冊	全三冊	全一冊

羽様荷香君の作は、其のすべてが十人好きのするやうにお芝居式に面白く出来て居る、中にも、『命』『雲』『男』『電』『武士系』の各編は、著者が最も心血を凝いだした苦心の作であつてまた最も得意會心の作なのである。

『命』『雲』『男』『電』『武士系』の各編は、新聞に、演劇に、活動寫眞に、全國幾千萬の讀者看客をして、其の善者弱者には同情の涙を灑がしめ、其の悪者強者には憤憤の血を沸かしめ、熱狂せしめ哀泣せしめ、傷心し斷腸せしめた、大悲劇小説でまた大活劇小説を兼ねたもので悲愁もあり、滑稽もあり、戀もあり、意氣地もあつて、實に荷香君の述作中での代表的傑作である、未看の士女よ、乞ふ一讀せられんことを。

樋口隆文館發行

新田静湾君作

愛と財 谷洗馬君書 全三冊 各一冊 實價四十五錢宛 送料三冊二付八錢

戀の淵瀨 須藤宗方君書 全三冊 各一冊 實價四十五錢宛 送料三冊二付八錢

戀と金と命 須藤宗方君書 全二冊 各一冊 實價五十錢宛 送料二冊二付八錢

富の力 谷洗馬君書 全三冊 各一冊 實價四十五錢宛 送料二冊二付八錢

新田静湾君の作は、そのすべてに教訓の意義が含蓄されて居る。内容も極めて温健であるからよしや嚴肅な家庭の讀物とせられても一向に差支の無い良好の小説です。中には「愛と財」は頗る情趣に富んだもので心貌共に麗しき可憐の新妻が、憐れ且暮意地悪き姑小姑の二人に苛められ、二世と契りし良人には、心残り可憐の乳兒を、死出の旅路の洋館に、可憐な香も盛り花を、鐵車の轍に散らさんとした、極めて悲哀な筋の小説。「富の力」は一青年が富の威力の大なるに感憤して猛然志を立てし立志傳で、其發奮の動機には極めて傷心の物語がある。「戀の淵瀨」は麗しくして年若き婦人が、誘惑多き中に立ち、能く獨立獨行し得ん事の如何に至難の業なるかを諷したもので、あはれ十年の風雪をも凌いで未開を誇りにし一輪の蕾も、一夜の魔風は遂に之を破れり、あ、弱き者よ。汝の名は女なり「戀と金と命」は、金が有り過ぎて却て種々の面倒が起るといふ意味を寓したもので、よく嚼みしめると大變に味のある小説。

鹿嶋櫻巷君作

梨園情話 谷洗馬君書 全二冊 實價各五拾錢宛 送料二冊八錢

海の豪傑 谷洗馬君書 全三冊 實價各四拾五錢宛 送料三冊八錢

女賊三人 谷洗馬君書 全二冊 實價各五拾錢宛 送料二冊八錢

これは櫻巷君の最近の作であつて、一時間題の人となつた知名なる某文學士と某女優との間に纏綿した多情多恨の情話をかいたもので其立者が何人であるかは明敏なる讀者の頭脳には直にそれが判じ得られる。

現今、不羈獨立の邦國にして四面環海の國と云へば、僅かに我日本と英國とを數ふるのみ、英は海上の覇者として既に久しく世界に雄視して居る、彼は誇るべき提督ネルソンを有し、傳ふべき船長クークを有す、省みて我は如何、吾人は海上の英雄として彼に誇り得べき何人有するや、櫻巷君の作「海の豪傑」一編、これ海洋に於る吾人の祖先が如何に勇敢に進取的なりしかを語れるの記録、乞ふ既に軟弱不健全なる戀愛小説に倦みし讀者は轉じて此剛壯痛快なる史實小説を讀め。

三人揃て花の様な美人で可、恐、女の賊である、泥龜お仙兒電也お國奥様お豊如何に彼等が男子を弄ぶ其怪腕の物凄さを見よ。

面白怪談三種

行友李風君作 極彩色口繪挿入
歌川珖舟君書
怪談人の怨 全三冊
定價全一冊五拾錢宛
送料三冊八錢

芳尾生君作 極彩色口繪挿入
歌川國松君書
新皿屋敷 全三冊
定價各一冊四拾五錢
送料二冊八錢

雪鷺庵君作 極彩色口繪挿入
川上恒茂君書
怪談長者屋敷 全二冊
定價各一冊四拾五錢宛
送料二冊八錢

本編は有名なる小幡小平次淺香の沼の怪談をば著者が獨擅の凄奇怪慘の筆で一種の文体に記述せられたもので、何人にでも讀まれ得る八方向きの怪談物でございます。

古來傳説せる播州皿屋敷の怪談は既に普く人口に膾炙して居るが、この新皿屋敷の怪談に至つては、知れる人世間未だ多からず本編は神戸又新日報紙上にて大好評を博せしものにて各地に於て劇に演せられても亦非常の大入を占し面白きもの乞ふ一讀せられんことを。

これは姫路で有名なる長者屋敷の事實怪談をば雪鷺庵君が獨特流麗の筆で更に面白く潤色せられ、新聞紙上でも非常の大好評を博した樋口隆文館の専賣物です。

樋口隆文館發行

江見水蔭君作

金洞 全三冊
毒血の壺 全三冊
三怪人 全四冊
大正五人女 全五冊
蠻勇の人 全二冊
純子 全二冊
泣かぬ女 全三冊
探偵の娘 全二冊

我文壇に於て江見水蔭氏は既に第一流の人として世間に許されて居る、上記の各編は氏の近作中に於ける代表的の物で、中にも最近會心の傑作は『毒血の壺』がそれである。其他『金色洞』は艶色無類の若後家に眞摯篤學の植物學者を配した極情の深い面白いもので『三怪人』と『探偵の娘』とは各特色のある探偵小説、五人女は其題の如く極新しい五個の女性を異なれる性格に描寫し『純子』と『泣かぬ女』とは此人の作中での悲劇小説『蠻勇の人』は一青年の立志小説で悲哀な中に滑稽味を含んだ小説。

江見水蔭君作
金洞 全三冊
毒血の壺 全三冊
三怪人 全四冊
大正五人女 全五冊
蠻勇の人 全二冊
純子 全二冊
泣かぬ女 全三冊
探偵の娘 全二冊

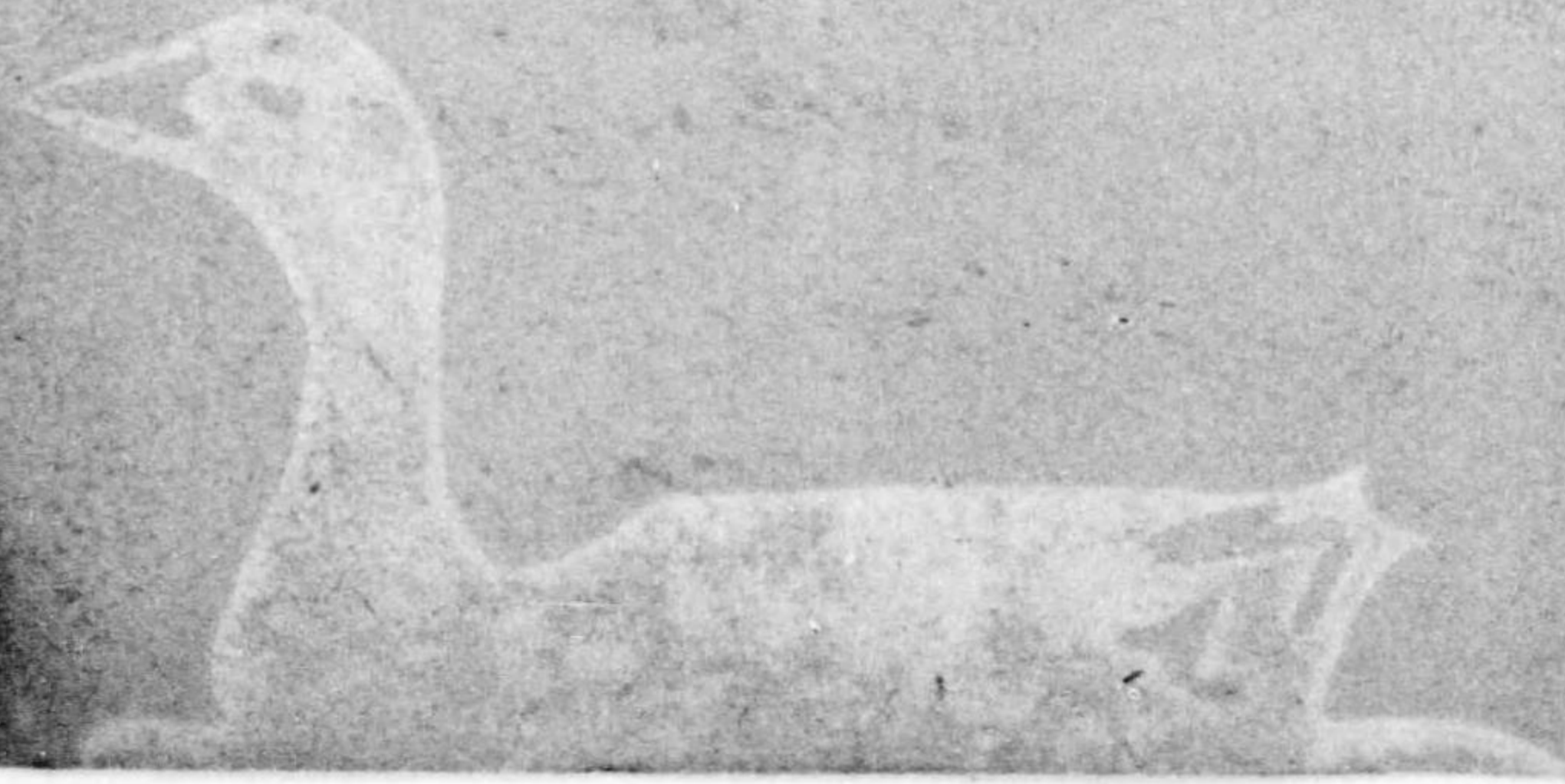
樋口隆文館發行

中村兵衛君作

- 血染の手巾 全壹冊
- 妻の罪 全壹冊
- 二人の影 全壹冊
- 水月尼 全壹冊
- 月の輪 全壹冊
- 父無き子 全貳冊
- 甚九郎稻荷 全參冊
- 義侠の青年 全壹冊
- 狸心中 全壹冊

中村兵衛君の作は總じて一般向に面白く出来て居ます、中にも血染の手巾は探偵小説としては最も讀者に歡迎せられたもの、妻の罪とは知名なる某紳士の夫人が秘密に犯せし罪の物語で、月の輪と共に家庭向の好讀物、父なき子と二人の影とは青年に少女と藝妓とを絡ました此人の作中での悲劇物で、水月尼は一風變つた極めて剛快な女丈夫の傳記、甚九郎稻荷は備前岡山で有名な甚九郎稻荷の由來記であつて孤忠を懐いて數奇なる運命と戦ひし佐久間甚九郎の一代を叙したもので、狸心中は神戸に於ける事實談、いづれも各地の新聞で大好評を得し小説。

279
279



大阪

樋口隆文館發行

終